

真宗における「老い」の思想

——親鸞・蓮如を中心に——

滕 憲 之

高齢社会を迎えた日本において、人間の「老い」の問題が、多くの場所で語られるようになってきている。一言で「老い」の問題と言っても、それは単に加齢に伴う身体的機能の衰え（肉体的問題）のみを取り上げるのではなく、「老い」そのものに対する不安感や、その受容に関すること（精神的問題）、高齢社会における社会施策や老後の生活に関すること（社会的問題）等が、様々な視点によつて論じられているのである。

さて、このような状況の中で、仏教は「老い」の問題に如何に関わっているのか。言うまでもなく、仏教においては「老い」を四苦（生老病死）の一つに挙げ、人間にとつては避けられない道の一つとして考える。そして、それを超えていく思考、方法が釈尊の時代から様々な場面で示されてくるのである。つまり人間の老いの解決ということは仏教思想の根幹に関わる重要な問題の一つであるとも言えるのである。ただ、「老い」そのものが個別に論じられることはあまりないようであり、多くの場合、生死観、苦、生老病死等の問題の

中で部分的に取り上げられる。これは「老い」の持つ抽象性、あるいは「老い」の問題が最終的には生死の問題に含まれる（苦の原因は同様とする）とする考えが多いからである。このような考えはもつともなことであるが、その一方において、先に示したような日本社会の現状を考えると、もう少し「老い」そのものについて考える必要があるのではないかと思われる。

そこで今回は、真宗における「老い」の問題を、真宗思想の基礎ともいふべき親鸞、蓮如の思想を中心にしての考察をしていくことにした。なお、本テーマは未だ研究中の段階であり、また紙数の都合もあるので、不十分に思われる箇所があると思うが、その点をご容赦いただきたい。

先に仏教思想研究の中で老いの問題が個別に扱われることは少ないということに触れたが、それは親鸞、蓮如の思想研究の場においても同様であり、法話等ではしばしば取り上げられるものの、「老い」そのものが個別の研究対象として論

じられることはほとんどない。確かに、親鸞、蓮如の両者は所謂「長寿」の部類に入るにも関わらず、特に親鸞の場合は、著作等に「老い」に関することがほとんど述べられておらず、これを研究対象として思考していくことは困難なことかもしれない。しかし、真宗教団においては近年、ビハールなどで、高齢者に深く関わってくる活動を展開しており、このような点等から考慮すると、「老い」ということに対し、もう少し研究していかねばならないのではないかと思われる。ただし、真宗において「老い」を語る場合、精神的部分の問題が中心になるということは指摘しておかねばならない。加齢に伴う身体の衰え、肉体的問題は真宗思想において解決できる問題ではなく、医療や科学等での分野の問題となつてくると言えよう。確かに、著述等より、親鸞、蓮如ともに加齢に伴う肉体的問題に直面していたことは明らかであるが、結果的には、それを如何に克服していくのが真宗思想の中の「老い」問題の中心課題となつてくると言える。

さて、親鸞と蓮如の「老い」に対する姿勢についてであるが、両者の間には思想や晩年の生活状況等にいくつかの相違点はあるものの、その中には共通点も見られる。例えば、著述等から判断すると、両者は身体的衰えに苛まれ、老いを必ずしも肯定的には捉えていないものの、それに対する恐怖心といったものはほとんど見られない点。また、老いを死に近

い存在として捉えている点などがそうである。これを具体的に見れば、親鸞の場合、「目もみえず候。なにごとみなわすれて候うへに」（『末燈鈔』『真宗聖教全書Ⅱ』六六九頁）と自身の老いを認めた上で、

この身は、いまは、としきはまりてきふらへば、さだめてさきだちて往生し候はんずれば…（『末燈鈔』『真宗聖教全書Ⅱ』六七三頁）
親鸞はさきだちまいらせ候はんずらんと、まちまいらせてこそ候つるに、さきだたせ給候事、申ばかりなく候…（『高田入道殿御返事』『真宗聖教全書Ⅱ』七二四頁）

等とし、老いによつてもたらされる「往生」、あるいは人間存在の限界というものを十分に認識しており、蓮如も、自身の老いについて「いつのまにかは年老のつもるらんともおぼえずしらざりき。しかるにそのうちには、さりとて、あるひは花鳥風月のあそびにもまじはりつらん。また歎楽苦痛の悲喜にもあひはんべりつらんなれども、いまにそれとおもひいだすこととはひとつもなし。ただいたづらにあかし、いたづらにくらして、老のしらがとなりはてぬる身のありさまこそかなしけれ。」（『御文章』四帖目四『真宗聖教全書Ⅲ』四七九頁）と語り、その一方で

老らくの いつまでかくや 病なまし ムカヘタマヘヤ 弥陀ノ
浄土へ（『真宗資料集成』第二巻 三六二頁）

八十地五ツ 定業キハマル ワカ身哉明 応八年 往生コソスレ

（同右）

などとし、親鸞と同様に「老い」と「死」に直面している自身の姿を十分に認識していることが分かる。

このように見ていくと、親鸞、蓮如の「老い」に対する思想は、現代社会が「老い」を「暗」のイメージとして捉え、「対決」、「逃避」していくような思考傾向とは明らかに異なり、身体的老化に対して、あくまで人間の営みにおいては必然なものとし、明暗どちらのイメージに片寄ることなく、死に向かう段階として、淡々と捉えているものであるといっていることが分かる。これは言わば「老い」の十分な「受容」である。つまり、親鸞、蓮如は、深い信仰に基づき形成された「老い」の思想（当然、そこには生死観、浄土観、人間観などの多数の要素を含むが）を「受容」することにより、加齢に伴う様々な苦の問題を克服していったと言えるのである。それだからこそ、無論、健康状態も大いに関係するのだが、両者共に晩年まで精力的な活動が行えたのではなからうか。

ただ、ここで改めて指摘しておくが、「老い」受容に関して、親鸞と蓮如とは、その姿勢は全く同じという訳ではない。両者ともに老いに対する受容は成されていたと思われるが、その後の姿勢については異なる。先にも少し述べたことであるが、親鸞の場合は結果として、「老い」の問題は自身の信仰に何の妨げにもならないものとし、「老い」について

著述等でほとんど触れることがなかったのであるが、一方の蓮如においては「老い」の心情を、教義的部分に付しながら和歌などの多くでそれを吐露し、「老い」の場における信仰の形態を明らかにしているように見える。これは両者の思想的及び社会的背景の違い等に起因するものと考えられる。これらについての研究の詳細はまたの機会に譲りたいと思う。ともかく、真宗思想において「老い」の問題を考える場合、信仰を基礎とした「老いの受容」といったものが、一つの大きな特徴として現れてくるのではないかと思われる。今後、さらに親鸞や蓮如の思想構造を探りつつ、本研究を充実させていきたいと考えている。

（キーワード） 親鸞、蓮如、老

（龍谷大学研究生）